三菱テニスの精神がここに

Tennis Magazine plus

テニスマガジン+プラス

HI盃選手権試合・全三菱庭球大会

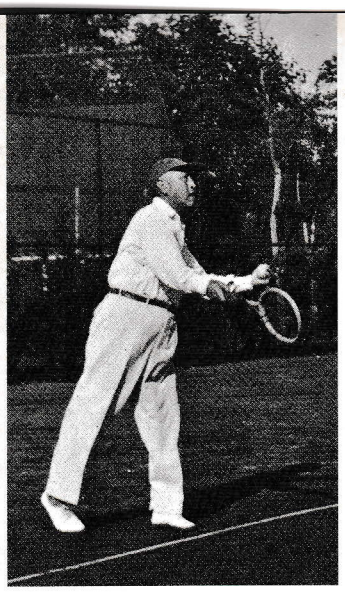
復活60周年記念

特別号

日本のテニス、三菱のテニス

HI盃選手権試合・全三菱庭球大会
～戦後復活60周年を振り返る

取材・文◎秋山英宏　写真◎菅原 淳
資料提供◎三菱庭球同好会



復活第1回大会でプレーする岩崎彦彌太氏

HI盃と「三菱テニス」の歴史
それは日本テニスの発展とともにあった。

日本オリンピック史上初のメダルはテニス選手がもたらしたものである。1920年のアントワープ五輪に出場した熊谷一弥は、シングルスで銀メダルを獲得。柏尾誠一郎と組んだダブルスでも同じく銀メダルに輝いた。

翌21年、デビスカップに初参加した日本は、インド、オーストラリアなどを破って決勝に進出した。アメリカに敗れたものの、初参加で決勝進出の快挙は世界を驚かせた。メンバーは熊谷、柏尾と清水善造だった。

いずれも日本テニス草創期の華々しい歴史の一幕である。この頃、熊谷は三菱銀行ニューヨーク支店勤務、清水は三井物産カルカッタ支店勤務だった。のちのデ杯選手で日本初のプロテニス選手となった佐藤俵太郎は、偉大な先輩たちを評して「洋をはさんで、熊谷、清水という二大選手誕生」と書き記している（『日本テニス協会七十年史』）。

プロが出現していない時代である。熊谷も清水も、民間企業に籍を置き選手として活動した。企業が日本テニスを支える時代はその後も長く続く。企業人として仕事に励み、同時にテニスに打ち込むという良き伝統は絶えることがなかった。

デ杯初参加から、遡ること10年。つまり、今から100年前の1911年に発足したのが三菱庭球部（のちの三菱庭球同好会）である。三菱は、熊谷のあとにも名選手を続々と輩出する。これまでデ杯代表に送り出した選手は山岸二郎、中野文照、石黒修、藤井道雄など7名にのぼる。一世紀に及ぶ三菱のテニスの歩みは、日本のテニスの歴史とそのまま重なるといっても過言ではない。

その「三菱テニス」の象徴が、HI盃だ。1923年、岩崎彦彌太から寄贈された銀製カップの争奪戦として『第1回HI盃選手権試合』が開催された。これは、三菱グループ各社の精鋭が全国から集い、岩崎のI、彦彌太のHのイニシャルが冠せられた優勝カップを争う男子シングルスである。

その後、HI盃は太平洋戦争の戦況悪化により中断。戦後の財閥解体で三菱各社の連絡は絶たれ、岩崎彦彌太は47年に公職を追放された。しかし、51年には公職追放が解除となり、それを受けて、52年、三菱テニスマンの悲願であったHI盃の『復活第1回大会』が開催された。

大会は隆盛となり、72年には女子ダブルス、83年には130歳トーナメント、2006年には男子ダブルスが新設される。それらの総称が『全三菱庭球大会』だが、「HI盃」は大会の象徴であり、大会全体を指す愛称としても参加者に親しまれている。

歴代の優勝者にはデ杯選手を始め、有名選手の名前も並ぶ。企業グループ内の大会とは思えないほどの顔ぶれだ。2010年は三菱金曜会関連32社が参加し、本大会には244名が出場。グループ各社のテニス部員は、総勢約5000名に達するという（04年調べ）。

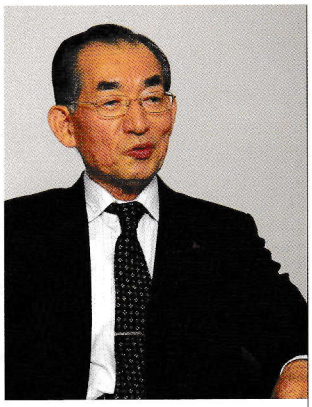
HI盃で鍛えられた三菱テニスの伝統は実業団の対抗戦でも発揮されている。1986年に創設された日本リーグには、これまでにグループ8社が出場。昨年は三菱電機男子チームが準優勝の好成績を収めた。

そして今年、「三菱のテニス」は大きな節目を迎えた。5月に三菱東京UFJ銀行取締役の畔柳信雄氏が日本テニス協会会長に就任。また、庭球部は発足100周年を迎え、HI盃は戦後復活から60周年の記念大会として開催されることとなったのである。

戦後復活HI盃発会式（1951年／東京・染井にて）

HI盃 男子シングルス優勝盃

復活第15回大会優勝の藤井道雄氏（右）と石黒修氏（ともに三菱電機）



Interview 01

「HI盃の伝統を受け継ぐ」

HI盃選手権試合・全三菱庭球大会委員長
三菱庭球同好会会長
三菱マテリアル(株) 取締役会長

井手明彦

HI盃の歴史は約90年前に遡ります。三菱の創始者、岩崎彌太郎氏のお孫さんである岩崎彦彌太氏より銀製のカップを寄贈していただき、1923年に『HIカップ戦』として初めて開催され、通算80回を数えます。戦中戦後しばらく中断を余儀なくされましたが、テニスを、そして三菱を愛する方々のご尽力で、1952年に悲願であった復活を果たし、今年、復活60周年を迎えました。

スポーツによって育まれるスポーツマンシップは、常に公明正大であろうとする三菱の経営理念にも通じるものです。スポーツを楽しむことが心身の健全な成長を促し、明日への活力の源となることはもちろん、大会を通じてグループ各社の連係、交流を深めることにも結びつきます。「HI」とは岩崎彦彌太氏のイニシャルであると同時にグループ関係者の横のつながりを表す「Horizontal Integration」にも通じるものとなっています。また、何ごともフェアプレーに徹することは、三菱グループの行動指針である「三綱領」の一つ「処事光明」の理念を共有し、確認することにつながり、三菱グループの発展の原動力となっています。

HI盃は三菱グループ、日本テニスの発展とともにある

三菱グループは、大正末から戦前にかけてデ杯選手や全日本覇者など幾多の名選手を擁する、テニス王国でした。その最たるものが1920年のアントワープ五輪で日本のオリンピック史上初のメダルを獲得した熊谷一弥氏です。

その後も含め、三菱はこれまで計7名のデ杯選手を送り出しました。そして、その時々の日本のトップ選手が出場し、HI盃を争ってきたのです。また、この5月には、畔柳信雄HI盃副委員長が日本テニス協会の会長に就任され、日本テニス界の発展にさらに尽力されることになりました。このように、三菱グループが生んだ名選手、愛好家たちが日本テニスの基礎を作り、その発展を支えてきたと言っても過言ではないでしょう。

私自身は、HI盃を岩崎家から託されたカップをお預かりしている大会ととらえ、これをいつまでも守っていくつもりで大会委員長を仰せつかっています。岩崎家でも、ことのほかHI盃を大事にしてこられました。今でこそ、岩崎家は三菱グループの経営になんら関係ありませんが、原点というものを考えれば、三菱各社は岩崎彌太郎を礎として発展した会社です。従って、年に一度のHI盃を通じて原点を確認するという意味でも非常に重要な大会ではないかと思っています。

私は学生時代からずっとサッカーをやっていましたので、隣のサッカーグラウンドからHI盃の模様をよく見て、それが非常に大きな大会であると知っていました。私自身、40歳くらいからテニスを始め、また、銀行で責任あるポジションを任せられるようになると、このHI盃が銀行のテニス部にとっても非常に重要なイベントであることを認識していきました。

岩崎家の直系である寛彌さんには、直属の部下として仕えていました。寛彌さんのお父さんでHI盃を寄贈された彦彌太さんは、とてもテニスを愛された方です。その姿を見て育った寛彌さんもまたテニスを愛し、HI盃選手権を大事になさったのです。私に「HI盃は大事にしてくれよ」と直接おっしゃったこともありました。その謦咳に接し、また、大会にも関わっていろいろなことを知るにつれて、このHI盃をいっそう大事にしていきたいなと思っているところです。

フェアに競い、結果を受け止め次に向かって進む——それを継続する

企業というのは互いに競争しています。そこでは物事を効率よく進めていくことが評価されます。また、フェアな競争をするのだけれども、結果として社会全体がよくなるというのが企業のあり方だと私は考えています。一方、フェアプレーを貫き、より鍛えたものが勝利するというのがスポーツの世界です。そこには非常に清々しいものがあります。

そう考えていくと、企業のあり方とスポーツには、ある種、通じるところがあると思います。社会では、それぞれが自分を鍛えながら社会人として生きていくわけですが、そこにも、いい意味での競争原理が存在します。仲良くしつつ、鍛え方を競うわけです。そうして、結果を受け止め、次に向かって進んでいく、社会人の生き方とはその繰り返しです。ですから、スポーツの持つ本質は、企業人として社会人としての生き方と非常に共通するものがあるということですね。

HI盃は、そうした本質的なものに触れることができるからこそ、これほど長く続いているのだと思います。また、こうしたスポーツの本質は三菱精神とも一致しているように思います。所期奉公（期するところは社会への貢献）、処事光明（フェアプレーに徹する）、立業貿易（グローバルな視野）はグループ各社が掲げる三綱領です。HI盃はテニスというスポーツを通してその精神を共有する場となっています。

大事なのは続けていくことです。それには、選手にとってやりがいのある場にしていくことでしょう。三菱グループの企業の経営者の方々にできるだけ多く見にきていただくことで、選手はもっと張り切るでしょう。そういう努力はいつも続けるべきです。

HI盃はそれぞれの企業を離れて交流を図る場、大事な場です。できる限り続けて、次の世代に引き継いでいきたいと思っています。

Interview 02

「スポーツの本質は企業人の生き方に通じる」

HI盃選手権試合・全三菱庭球大会副委員長
(株)三菱東京UFJ銀行 取締役会長
日本テニス協会会長

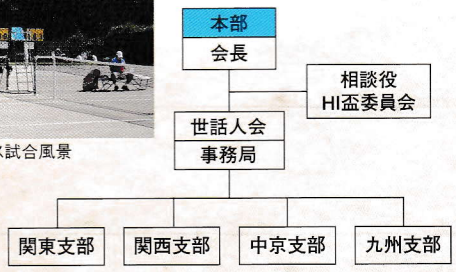
畔柳信雄

大会概要

日程:例年10月の3日間（本年度は14～16日）
会場:三菱関連各社コート（武蔵野、多摩、飛田給）
種目:6種目（男子SD、女子D、130歳D、120歳D、東西対抗D）
参加者:三菱金曜会関連32社 ※2011年時点
旭硝子（株）／キャタピラージャパン（株）／キリンホールディングス（株）／JXホールディングス（株）／東京海上日動火災保険（株）／（株）ニコン／日本郵船（株）／（株）ピーエス三菱／三菱アルミニウム（株）／三菱化学（株）／三菱化工機（株）／三菱ガス化学（株）／三菱地所（株）／三菱自動車工業（株）／三菱重工業（株）／三菱樹脂（株）／三菱商事（株）／三菱商事ユニメタルズ（株）／三菱伸銅（株）／三菱製鋼（株）／三菱製紙（株）／三菱倉庫（株）／（株）三菱総合研究所／三菱電機（株）／三菱電線工業（株）／（株）三菱東京UFJ銀行／三菱ふそうトラック・バス（株）／三菱マテリアル（株）／三菱UFJ証券ホールディングス（株）／三菱UFJ信託銀行（株）／三菱レイヨン（株）／明治安田生命保険相互会社
本大会出場選手:244名　グループテニス部員:約5000名（2004年調査）

HI盃、男子シングルス試合風景

三菱庭球同好会組織図



クローズアップHI盃

■ 悲運の山岸二郎

慶應大学時代に全日本テニス選手権で4度優勝している山岸二郎だが、三菱商事に入社後、体力のピークである20代は戦争のためHI盃が開催されず、1952年に復活した後も一度も優勝することはできず、時代に泣いた選手であった。

■ 驚異の6連覇、藤倉五郎・石黒修

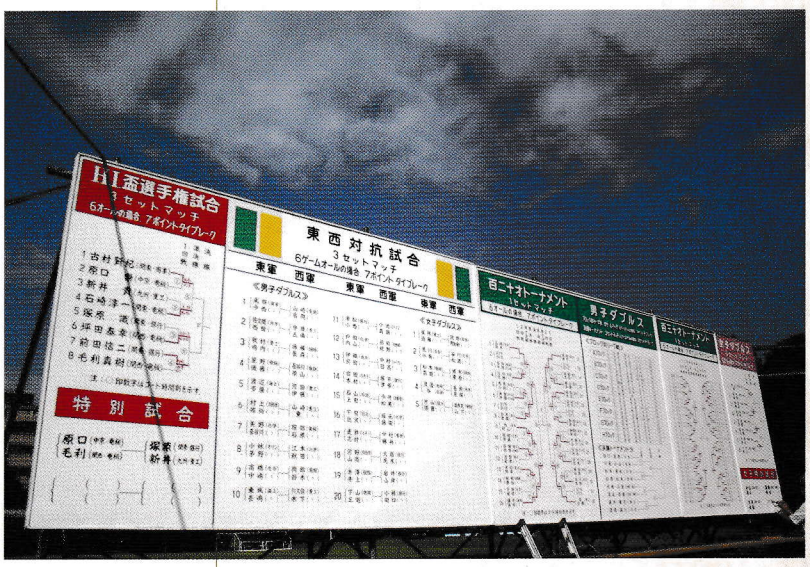
全日本テニス選手権で優勝1回、準優勝4回の藤倉五郎（金商又一〈現三菱商事ユニメタルズ〉）は、復活第1回大会（1952年）から第6回大会（1964年）まで、3度の全日本優勝を誇る石黒修（三菱電機）は復活第8回大会（1959年）から第13回大会（1964年）まで、いずれも6連覇を達成している。藤倉が6年間で落としたセット数がわずか2セットに対し、石黒は、現審判長の生川芳久（三菱化学）とのファイナル9−7（1960年）や、同じく三菱電機でデ杯選手だった半那毅男とファイナル11−9など数々の激闘を制しての6連覇だった。

■ 無敵、7回優勝の藤井道雄

歴代最多となる7回優勝を果たしたのが藤井道雄（三菱電機）。最後に優勝したのは1979年で、なんと39歳での優勝だった。なお、6回優勝は、藤倉五郎（52〜57年）、石黒修（59〜64年）、辻本豊（75、83〜85、90、93年／三菱レイヨン）、古村賢紀（98、01、03〜06年／三菱電機→三菱商事）の4人。

■ 歴代最多出場者、辻本豊

HI盃の歴代最多出場は辻本豊の23回（23回連続出場）。そのうち6回優勝しており、まさに鉄人と呼ぶにふさわしい記録だ。次いで、生川芳久の18回出場が記録されており、1960〜84年の25年に渡る出場は歴代1位。ちなみに、辻本の通算35勝は歴代1位、次いで藤井の31勝、古村の25勝となっている。



『HI盃選手権試合・全三菱庭球大会』の試合スコアボード

■ 群雄割拠のニュージェネレーション

2007年以降、前田信二（三菱東京UFJ銀行）、中原健一郎（三菱商事）、藤田瑞飛（明治安田生命）ら学生時代に国内外で活躍した選手がHI盃で優勝。また、本大会に出場する選手も、ほぼ全員がインカレクラスの選手で、誰が優勝してもおかしくない、まさに群雄割拠の時代に突入した。

～戦後復活にかける思い～

戦後、HI盃が復活するまでには実に7年の歳月を要した。戦前、一体経営であった三菱合資会社は、終戦後の財閥解体、岩崎彦彌太氏の公職追放もあり、一同に会する場を失っていた。全三菱横断の連絡機関であった「三菱養和会」は、本社解体後「養和会」と改称、一般に開放されることとなり、全三菱を繋ぐ機会はHI盃以外になく、一日も早い再開を望む声が大きくなる中、数年間に渡る染井、伊丹、黒崎、名古屋での準備大会（テニス及び懇親会）を経て、岩崎氏の公職追放解除の翌1952年、三菱各社の尽力のもと、復活第1回大会を開催する運びとなった。これにより、岩崎彦彌太氏のイニシャルから名付けられたHI盃は、横の繋がりを意味するHorizontal Integrationの意味合いがさらに強まった。（※出典：「HI盃復活10年誌」大淵鉄太郎氏、河尻慎氏の寄稿）